様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０４１９

研究課題名（和文）李叔同（弘一法師）をめぐる日中文化交流の研究：中国の近代化と日本

研究課題名（英文）A Study on Sino-Japanese Cultural Exchange Focusing on Li Shutong (Master Hongyi)

研究代表者
大野　公賀（Ono, Kimika）

東洋大学・法学部・准教授

研究者番号：２０５４８６７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円、（間接経費）　　1,110,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代中国における西洋文化受容の草分けである李叔同（弘一法師、1880-1942）の日中両国での文化活動および、その周辺の日中知識人との関係に着目し、20世紀前半の日中の文化交流について検証した。李叔同は1905年から11年にかけて日本に留学し、西洋美術や音楽、演劇等の西洋文化を受容し、帰国後は中国の近代化に多大な影響を及ぼした。李叔同の1918年の突然の出家は、中国の文芸界からは近代化の否定と認識され、大きな衝撃を与えたが、日中両国の仏教交流の発展にも大いに貢献した。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the cultural activities of Li Shutong (Dharma Master Hongyi, 1880-1942) in Japan and China, and the relationship with his surrounding intelligentsia in both countries, we examined about the Sino-Japanese cultural exchange in early 20th century. Li Shutong studied western culture, such as art, music and drama in Japan from 1905 to 1911, and passed it to China after his return. He had a great influence on China's modernization. However, his sudden decision to become a monk shocked Chinese literary society, since they regard it as a denial of modern culture. Though it was difficult for Master Hongyi to get the comprehension of his contemporary intellectuals, he also made a substantial contribution to the development of Sino-Japanese Buddhism exchange.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学　　各国文学・文学論

キーワード：日中文化交流　日中仏教交流　李叔同　弘一法師　芸術　宗教　近代化　国民国家

１．研究開始当初の背景

(1) 李叔同（1880-1942）は 1905 年から 1911 年にかけて日本に留学し、東京美術学校(現東京藝術大学)で西洋美術や音楽を学ぶ一方、中国最初の新劇団体「春柳社」を結成し、「椿姫」等を東京で演じて好評を博する等、近代中国における西洋文化受容の草分け的存在として知られている。しかし、近代中国における西洋文化の受容史に李叔同が残した足跡の重要さにも関わらず、本研究の開始当初、李叔同に関する研究はまだ始まったばかりであった。その最大の要因は、李叔同の出家である。李叔同は 1918 年に出家し（法名釈演音、号弘一法師）、南山律宗第十一代祖師として、日中両国で人々の崇敬を集めた。

(2) 外圧による近代化を余儀なくされた当時の中国において、仏教哲学は一種の精神的支柱あるいは理論武装の手段として、康有為や章炳麟、厳復ら新思想家の間で流行した。しかし、それはあくまでも思想としての在家仏教であり、李叔同のように実際に出家する者は極めて稀であった。李叔同が出家した 1910 年代後半、中国では五四新文化運動を経て、芸術教育が興隆し、西洋の芸術や文化への期待が高まっていた。そのような折、最初期に日本で西洋美術や音楽、演劇を学び、当時の中国の文芸界に新たな刺激と変革をもたらしうる存在として期待されていた李叔同が、仏教という伝統的価値観に突如回帰したことは中国文芸界に大きな衝撃を与えた。

(3) 従来、西洋文化と仏教はそれぞれ近代と伝統を象徴する、完全に相反するものとして認識されてきたため、弘一法師としての名声が高まれば高まるほど、日中両国における研究では、李叔同としての活動は軽視されがちであり、また演劇等の一部の活動に限定されていた。そのため、本研究では李叔同が日本で受容した西洋美術や音楽等の文化全般について実証的に検証し、また李叔同（弘一法師）をめぐる日中両国の知識人との交友関係について考察したいと考えた。

２．研究の目的

(1) 本研究は中国近代化の過程で西洋文化受容の先駆者として、その礎を築きながら、数年後に出家し、中国の伝統文化に身を置いた一人の知識人、李叔同（弘一法師）に焦点をあて、その交友関係を通じて日中両国の文化交流や、両国知識人の「国家」や「個」、「近代」に対する認識を明らかにしようとするものである。その意味において、本研究は日中文化交流史の研究であると同時に、当時の日中両国の知識人グループに関する研究でもある。これまで李叔同と日本との関係については、主として留学当時の活動、特に演劇方面に焦点があてられてきたが、弘一法師は出家後も上海在住の日本人書店主、内山完造を通じて、日本の僧侶や寺院、林芙美子ら日本人作家と交流を続けていた。本研究では李叔同（弘一法師）の交友関係について詳細に検証することで、李叔同（弘一法師）を中心に、国境を越えた知識人グループが存在していたことを明らかにする。

(2) 李叔同（弘一法師）をめぐる日中両国の知識人の交流について明らかにすることで、20 世紀前半の日中両国の文芸界の状況や、両国間の文化交流の有り様についても検討し、日中両国の近代知識人にとって共通の課題であった「国家」と「個」の問題についても明らかにする。

(3) 近代中国における西洋文化受容の第一世代である李叔同に焦点をあて、彼が日本で入手し、中国にもたらした「西洋文化の種」とは果たしてどのようなものであったのか、その実態を検証し、またその「種」が李叔同と同様に日本で西洋文化に触れた豊子ガイや劉質平ら第二世代に手渡され、五四新文化運動期を経て、更には豊子ガイの弟子で、魯迅の挿絵画家としても著名な陶元慶や銭君陶ら、第三世代へと受け継がれていく過程を再現する。

３．研究の方法

研究代表者、分担者は以下のように役割を分担し、かつ相互に協力しつつ、李叔同(弘一法師)とその周辺の知識人の交流ならびに西洋文化の受容に関する研究を進めた。

(1) 大野公賀（研究代表者）：李叔同が発案し、その宗教および芸術面での高弟である豊子ガイと共同で作成した『護生画集』を中心に、李叔同（弘一法師）の西洋美術受容と宗教観、ならびにその後世への影響について研究した。『護生画集』は弘一法師の死後も、豊子ガイによって作成が続けられ、全 6 巻(計 450 幅）が完成するには 45 年もの年月が費やされた。同画集は従来、勧善懲悪的な仏教の絵解きとして認識されてきたが、その図と画賛、また同画集に関して弘一法師と豊子ガイら関係者の間で交わされた書簡を詳細に分析することで、弘一法師と豊子ガイが日本経由で受容した西洋美術の神髄を、当時の中国社会で一般に広く受容されるように用いた様々な創意工夫について考察した。

(2)大野公賀：また、弘一法師の為した日中文化交流の一つに、宗教面での交流が挙げられる。法師は中国各地の寺院に放置されたままであった戒律や典籍を整理し、校勘、校訂の後に出版し、中国国内のみならず、日本の寺院や大学図書館にも寄贈した。そうした経典の中でも、全 120 巻、分装 48 冊から成る『華厳経疏論纂要』は大作で、復刻数はわずか 25 部であったが、15 部が日本に寄贈された。そのうち、弘一法師が自ら圏点を付け、愛蔵していた 1 部は黄檗宗大本山萬福寺に寄贈された。この寄贈の事実については中国内外の研究者に知られてはいたが、その行方は長らく不明のままであった。弘一法師の日本

への経典寄贈の際には、常に仲介の労をとった上海在住の書店主、内山完造の遺品ならびに萬福寺に保管されていた経典等を調査することで、この所在を明らかにし、内容を調査することが出来た。
(3) 西槇偉（研究分担者）：内山完造の遺品を調査することで、内山を通じて弘一法師と交際した日中の知識人（魯迅、郁達夫、葉聖陶、林芙美子ら）との関係について検証した。また、李叔同（弘一法師）と豊子ガイ、また李叔同の極めて親しい友人で豊子ガイの師でもあった夏丏尊の師弟関係および彼らが共有していた倫理観、芸術観に着目し、豊子ガイの『教師日記』と、ラフカディオ・ハーン『英語教師の日記と手紙』やアミーチス『クオーレ』等の作品との比較研究を行った。
(4) 呉衛峰（研究分担者）：豊子ガイの日本語および芸術観は、李叔同（弘一法師）のそれに大きく影響を受けていることから、豊子ガイが翻訳した『源氏物語』に着目し、その特徴について研究した。
(5) トウ捷（研究分担者）：李叔同とほぼ同時期に日本に留学した魯迅が当時、日本文化や、日本経由で受容した西洋文化にどのような影響を受けたかという視点から、両者を中心に、文学および芸術面での中国における近代的精神の普及について考察した。

４．研究成果
(1) 平成 23 年度
① 大野公賀は以前から、弘一法師が 1930 年代初旬に内山完造を通じて宇治の黄檗宗大本山萬福寺に寄贈した経典『華厳経疏論纂要』と、それに関して内山に送った礼状の所在を探していたが、平成 23 年度には両者が続けて発見された。そのため平成 23 年度には主として、これらの調査分析を行い、弘一法師や豊子ガイら、日本への留学経験をもつ中国の知識人と日本の知識人の交流のうち、これまであまり検証されていなかった仏教面での接点を明らかにすることが出来た。また李叔同が欧米ではなく、日本への留学を選択した背景として、当時の代表的教育者で、中華民国の初代教育総長も務めた蔡元培や、李叔同の出身地である天津の知識人ネットワークの存在と、彼らと日本との関係について考察した。これらの内容は、当時所属していた東京大学東洋文化研究所の紀要や、東京大学と南京大学の共催ワークショップ等で発表した。
② 西槇偉と呉衛峰は、李叔同の影響で日本に留学した豊子ガイによる日中文化交流について、それぞれ比較文学と日本文学の視点から研究を進めた。その内容はそれぞれの所属機関の研究論集等で発表した。トウ捷は、魯迅と李叔同の二人が同時期に日本に留学し、ともに中国の近代化に重要な役割を果たしながら、後に完全に異なる道を歩むに至った状況を理解すべく、魯迅の著作の解読を行った。その内容については、大野と同じく、東京大学と南京大学の共催ワークショップで発表した。
(2) 平成 24 年度
① 大野公賀は、平成 24 年度には『護生画集』に関する研究を進めた。同画集は弘一法師と豊子ガイの共作として、その存在は研究者のみならず、弘一法師を崇敬する仏教徒や、豊子ガイ漫画の読者には広く知られている。しかし、同画集は全 6 巻、計 450 幅から成る大作であり、また画賛が仏教哲理に基づいていることから、これまでは仏教をわかりやすく解説した勧善懲悪的な絵解きという理解が中心で、内容の詳細な検討や考察はほとんどなされていなかった。しかし、同画集には弘一法師と豊子ガイの芸術観や宗教観が全面的に反映されており、勧善懲悪という一言で説明するのは不十分である。また同画集は 1929 年から 1973 年という長期にわたって作成されたため、日中戦争や文化大革命の影響と思われる作品も多い。そのため、大野は『護生画集』各集と、それぞれの作成時期に弘一法師や豊子ガイ、その他関係者が著した作品や書簡等から、彼らの戦争認識と対応についても考察した。その内容については、東洋文化研究所の紀要や、ハーバード大学での国際ワークショップ、上海の復旦大学での学術研究会や国際シンポジウム等で発表した。
② 西槇偉は豊子ガイが日中戦争期に記述、発表した『教師日記』と、当時世界的に広く読まれていたアミーチス『クオーレ』との比較研究を行い、弘一法師と豊子ガイの師弟関係について考察した。その内容については、杭州で開催された豊子ガイに関する国際学術会議や現代中国学会全国学術大会等の他、一般市民を対象とした公開シンポジウム等で発表した。呉衛峰は浙江省桐郷の豊子ガイ記念館に保管されている『源氏物語』の翻訳手稿を調査分析した。トウ捷は前年度に続き、魯迅や陶晶孫ら、弘一法師と同時期に日本に留学していた近代中国の代表的文学者と日本の関係や、中国の近代化に日本の果たした役割について考察した。その内容は、所属機関の論集や、東京大学での公開シンポジウム等で発表した。
(3)平成 25 年度
① 大野公賀は前年度に続けて『護生画集』の研究を続ける一方で、弘一法師と同時期に日本に留学し、帰国後は中国の近代化に重要な役割を果たした周作人が豊子ガイと同様に竹久夢二に深く魅了された点に着目し、豊子ガイと周作人の竹久夢二に対する認識、および竹久夢二に代表される大正日本の文化受容の相違についても研究を進めた。その内容については、現在の所属機関である東洋大学法学部の紀要や、豊子ガイと竹久夢二に関する国際シンポジウム等で発表した。
② 西槇偉は前年度に続けて、比較文学の視点から、弘一法師と豊子ガイ、ハーンと日本の学生、夏目漱石と中勘介等の師弟関係に着目し、近代化を模索していた当時の日中両国

における倫理の問題について考察した。その内容については、所属機関の論集や、大野と同じく、豊子ガイと竹久夢二に関する国際シンポジウム等で発表した。またトウ捷は、魯迅や陶晶孫ら、留日派知識人と中国の近代化について、留米派知識人の聞一多に関する学会や同会報等で発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 13 件）
①大野 公賀、Feng Zikai’s Experience of War as Seen in A Teacher’s Diary、東洋法学、査読無、第 57 巻第 3 号、2014 年、442－423 頁。
②大野 公賀、豊子ガイ『護生画集』解題（２）心の自由を求めて、東洋法学、査読無、第 57 巻第 2 号、2014 年、145-173 頁。
③西槇 偉、幼児体験を描く文学　夏目漱石・中勘介・豊子ガイ、文学部論叢、査読無、第 105 号、2014 年、177-188 頁。
④ 西 槇　偉 、 The Student-Teacher Relationship: A Comparative View of Lafcadio Hearn, Amicis and Feng Zikai、Lafcadio Hearn Studies Style, Reception, and Resonance、査読無、2014 年、25-29 頁。
⑤トウ 捷、「影的告別」における魯迅の実存的思惟の図式考、日本聞一多学会報「神話と詩」、査読有、第 12 号、2014 年、25-43 頁。
⑥トウ 捷、陶晶孫と魯迅及び革命文学、関東学院大学人文科学研究所報、査読無、第 36 号、2013 年、93-111 頁。
⑦大野 公賀、『護生画集』解題(1) 豊子ガイの仏教帰依から第一集まで、東洋文化研究所紀要、査読無、第 162 冊、2012 年、1-53 頁。
⑧大野 公賀、黄檗山萬福寺所蔵『華厳経疏論纂要』と戦時下の日中文化交流、黄檗文華、査読無、第 131 号、2012 年、98-104 頁。
⑨トウ 捷、魯迅『野草・影的告別』におけるニーチェの影響　翻訳とテクスト分析から考える、日本聞一多学会報『神話と詩』、査読無、第 10 号、2012 年、43-72 頁。
⑩呉 衛峰、豊子ガイ訳『源氏物語』の出版の遅れについて、東北公益文科大学総合研究論集、査読無、第 21 号、2012 年、1-5 頁。
⑪西槇 偉、翻訳　豊子ガイ『縁縁堂随筆』その二、文学部論叢、査読無、第 103 号、2012 年、165-187 頁。
⑫ 大野 公賀、弘一法師(李叔同)と日本　清末から民国期の中日文化交流の一例として、東洋文化研究所紀要、査読無、第 160 冊、2011 年、39-78 頁。
⑬大野 公賀、豊子ガイの仏教信仰における弘一法師と馬一浮　『護生画集』を中心に、東京大学中国語中国文学研究室紀要、査読無、第 13 号、2011 年、129-154 頁。

〔学会発表〕（計 15 件）
①大野 公賀、竹久夢二へのまなざし　周作人と豊子ガイ、竹久夢二を愛した文人漫画家豊子ガイシンポジウム、2013 年 11 月 10 日、岡山大学。
②西槇 偉、幼時体験を描く文学　豊子愷と漱石、中勘助、夢二を愛した文人漫画家　豊子ガイシンポジウム、2013 年 11 月 10 日、岡山大学。
③トウ 捷、『影的告別』における魯迅の実存的思惟の図式、日本聞一多学会、2013 年 7 月 20 日、二松学舎大学。
④大野 公賀、中国漫画史のなかの竹久夢二、「日本・アジア学」教育プログラム「中国を見る眼」、2013 年 5 月 23 日、東京大学東洋文化研究所。
⑤大野 公賀、On Feng Zikai's War Cartoons (論文参加)、East Asia in the Context of World/Global History、2012 年 12 月 18 日、中国・上海・復旦大学文史研究院。
⑦トウ 捷、陶晶孫と魯迅及び革命文学、シンポジューム「東アジアにおける魯迅「阿Q」像の系譜」、2012 年 11 月 23、24 日、東京大学。
⑧西槇 偉、師弟関係の物語　ハーン『英語教師の日記と手紙』とアミーチス『クオーレ』と豊子ガイ『教師日記』をめぐって、日本現代中国学会第 62 回全国学術大会、2012 年 10 月 21 日、一橋大学。
⑨大野 公賀、追求精神的自由 従『教師日記』読豊子ガイ、文史研究院第 56 回学術研究会、2012 年 9 月 26 日、中国・上海・復旦大学文史研究院。
⑩西槇 偉、師弟関係の物語　ハーン『英語教師の日記と手紙』とアミーチス『クオーレ』と豊子ガイ『教師日記』をめぐって、小泉八雲「怪談」から創作舞台「青柳」公演　シンポジウム、2012 年 8 月 5 日、世田谷区民会館。
⑪西槇 偉、比較文学視野中的豊子ガイ散文以「師生関係」主題解読『教師日記』、第 2 回豊子ガイ研究国際学術会議、2012 年 5 月 20 日、中国・杭州・玉皇山荘。
⑫大野 公賀、Feng Zikai’s War Experience as Described in A Teacher’s Diary、Suffering Bodies during the Sino-Japanese War: 1931-1945、2012 年 4 月 6 日、米国・マサチューセッツ州・Harvard University.
⑬大野 公賀、李叔同与日本　清末至民国時期中日文化交流之一例、東京大学中文系・南京大学中国現代文学研究中心共催ワークショップ「現代中国文学与東亜」、2011 年 11 月 5 日、東京大学。
⑭トウ 捷、『野草・影的告別』裡的尼采影響従翻訳和文本分析説起、東京大学中文系・南京大学中国現代文学研究中心共催ワークショップ「現代中国文学与東亜」、2011 年 11 月 4 日、東京大学。
⑮西槇 偉、豊子ガイとハーン『教師日記』の比較を中心に、ラフカディオ・ハーン来熊 120 年記念シンポジウム「ハーンと樹霊と妖怪と」、2011 年 10 月 15 日、熊本県立図書館。

〔図書〕（計 4 件）
①大野 公賀 他、勉誠出版、周作人と日中文化史、2013 年、236 頁（51-71 頁）。
②大野 公賀、汲古書院、中華民国期の豊子ガイ　芸術と宗教の融合を求めて、2013 年、310 頁。
③西槇 偉、研文出版、響きあうテキスト　豊子ガイと漱石、ハーン、2011 年、364 頁。
④呉 衛峰 他、彩流社、越境する言の葉 世界と出会う日本文学、2011 年、486 頁（173-183 頁）。

６．研究組織
(1)研究代表者
大野 公賀（ONO, Kimika）
東洋大学・法学部・准教授
研究者番号：20548672

(2)研究分担者
西槇 偉（NISHIMAKI, Isamu）
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：50305512

呉 衛峰（GO, Eihou）
東北公益文科大学・公益学部・准教授
研究者番号：90458159

トウ捷（TO, Sho）
関東学院大学・文学部・准教授
研究者番号：50361556